



奥田 弁次郎・フミ②

地域史研究者

三善貞司

内助の功で奮起する弁次郎 興行は評判を呼ぶ

明治7年（1874）4月、お化けが出ると恐れられた千日墓地跡（現・中央区千日前1〜2丁目）の灰山（火葬した跡の遺灰を積み上げた所）が、「1坪に50銭もつけてただくれる」とたつた1軒だけ残ったオンボロ茶店のばあさんから聞いた弁次郎は、とんで帰り妻のフミに、

「灰山はこわいけど、50銭はほしいなあ。10坪もるとら5円もくれるそつや」と話します。

フミは返事もせず、家の中をガサガサ探していましたが、いきなり2百円もの大金をポンと投げ出して、こう言いました。

「灰山はあかん。どけるのになんばゼニがかかると思ってるのや。それよりこのお金で、ばあさんごと茶店を買いなはれ」

2百円は夫に内緒で、爪に火をともしようにしみつたれをして、こつそりためていたへソクリの全額です。

「ひ、ひゃあ！お前、山内一豊の妻や」

弁次郎はとびあがりました。

貧しかった下級武士の山内一豊は、主君織田信長が家臣の馬比べをしたいと言い出したとき、馬を持たない彼はまっ青になります。

ところがわけを知った妻は、かくしていた持参金黄金10枚を差しだし、名馬を買わせ、一豊は大いに面目をほどこします。これがきつかけとなって立身出世し、一豊が土佐20万石の大名になる話は、戦前の教科書では内助の功、貞女の鑑として絶賛されたものです。NHKの大河ドラマでも評判でしたね。

目をまん丸くして喜ぶ弁次郎に、フミは涙をいっばいたためて、

「あんた、今度こそ本気で働いてな」

と訴えます。なにしろ18歳のとき、親の反対を押しきって駆け落ちし、一緒になつてくれたフミの頼みです。初めて目のさめた怠け者の弁次郎は、生まれ変わったような気持ちになり、まじめに働くと誓います。

動物好きのフミは、以前から弁次郎が香具師仲間にもらつた猿をかわいがっており、赤い甚平（袖なしの簡単な着物）を着せて、ひまなときに芸を仕込んでいました。その猿もつれて改装した茶店にひっこしますが、

「千日前にな、けつたいな猿が茶店におるで。甚平着たり脱いだりしよる。お茶かて運ん

でくるで」

と評判になり、客が増えてきます。

こらいける…ポンとひぎをたたいた弁次郎は、茶店の横にむしろ掛けの小屋を建て、見世物興行を始めることにしました。

資金がないので見世物といつても、知れたものです。チュンチュン太夫(雀の名)の曲芸に大百足(実は伊勢エビでこしらえた作り物)、生き人形(口ウ細工のマネキンみたいな人形)、酒吞童子(大江山に住む鬼の真似をした盗賊。浄瑠璃で有名)の操り人形ぐらいですが、そこは口から先に生まれた弁次郎です。大げさにおもしろおかしくはやしたて、たまには軽業や女相撲、声色(声帯模写)、火を吐く人間ポンプも登場します。

まあ紙芝居に毛の生えた程度ですが、入場料はとりません。そのかわり演目が一つ終わると、フミがザルを持って観客に投げ銭を求めて分け入り、

「あの芸、よかつたでっしやる。お好きなだけでええさかい、投げておくんははれ」

「あの人、じいちゃんばあちゃんに、4人の子までかかえてまんね。食うのに困ってはる。助けてあげてな」と声をかけます。

集まった銭は折半です。つまりよその小屋とちがって、客に受ければ受けただけ芸人さんの実入り(収入)も多くなるのです。これでは芸人さんもりきらざるを得ません。

一般に芸歴や年齢・性別でギャラに大差がつくのですが、それも関係ない。なんでもいい、客に受けたほうが勝ちです。やる気をかきたてるフミの商法は当たり、小屋は繁盛していきました。

やがてプロの興行主たちも千日前に注目します。次々に芝居小屋や寄席が並び、射的(的の人形や菓子箱を射落とす遊び)にだるま落とし・風船釣り・金魚すくい等、子ども向きの遊戯施設も増えます。当然、うどん・そば・おでん・汁粉といった屋台が立ち、発展して酒や寿司を扱う飲食店も生まれます。

心斎橋や道頓堀と合わせて、千日前を繁華街にしたい大阪市行政のおもわくも加わり、弁次郎・フミ夫婦のまいた種は、成長し枝葉を伸ばし、花が咲き始めます。

「わいはじきに使うてしまつさかい、かあちゃん、お前がためといてくれ」

興行が面白くなってきた弁次郎は、もう大ぼら吹き の賭博好きではありません。ゼニのことはいつさいフミに任せ、新しい企画を立てては猛烈に働きます。

フミは質素儉約を美德とする女性でしたが、殖産と経営の才能は、弁次郎以上にありました。

「そや、夜店も出したろ」

と考え、夫の昔の仲間たちに声をかけます。



茶屋跡周辺

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッシュョンビジネス・御堂筋新聞